
授業書〈カッパの話〉の教師のための覚えがき

城 雄二

(広島大学学校教育学部)

この授業書の前半は松田道雄『からだところ』大雅堂を参考に
して作りました。

これは、科学の授業書ではありません。「前科学」ともいうべき
ことを取扱いたかったのです。ホントはどうかと考える態度、ホ
ントのことはどうやって決まるのかということ、カッパを通して
楽しく学んで欲しいと思って作りました。したがって、教師がな
にか(たとえばカッパはいないと)「教えたい」という気持ちが、も
し沸いてきても、その気持は放してください。これが一番のポイン
トです。そうすれば楽しい時間を子供たちは味わえるでしょう。

科学の学ぶおもしろさは、「無重力の場」でのみ味わえることで
あり、また、ホントかどうかは実験的にしか決まらない(決められ
うる)からおもしろいのでしょうか。教えられてきた「重力の場」
から開放され、みずから学ぶ楽しさをこどもたちにプレゼントした
いと思われる人だけが、この授業書をやって欲しいと思います。

そして、もしこの授業書をやると、「カッパがいる」という子が
増えたとしたら、それはたぶんこの授業書によって「教え」られた
からではなく、もともと「カッパはいる、いて欲しい」と本心では
思っていたその子供たちが、教えられた重力圏から開放されただけで
はないかと、わたしは考えます。

科学は本心を出し合えるところでのみ発展するのではないでしょ
うか。わたしは、こどもたちが本心を出し合って、ホントはどうか
と考え、実験で確かめることができる「広場」をすこしでも増やす
仕事に参画したいと思っています。